

# 薬剤耐性菌問題の今

---

広島大学病院 感染症科 大毛宏喜

# 症例：80代男性

---

- 大腿骨頸部骨折をきっかけに寝たきり
- 認知症あり
- 食べると誤嚥して肺炎を繰り返す

# 高齢者施設の事情

---

- 食事代の上限は月42,000円
  - 1食460円以内にする必要がある
  
- 食事の準備も食事介助も不要



360円

# 海外での胃瘻の考え方(認知症末期)

---

## □ 米国老年医学会

- 人工的な栄養投与は殆どの患者のためにならない
- 適切な口腔ケアと、氷のかけら程度が望ましい

## □ 欧州静脈経腸栄養学会

- 患者のQOLを改善させるという根拠がない
- 実施するか否かは個別の症例で判断する
- 実施する場合でも批判的・制限的に考えるべき

# 薬剤耐性菌対策の2ステップ

## □ 第一段階

→ 大規模医療機関

- 1996年 院内感染防止対策加算新設
- 2000年 院内感染対策サーベイランス(JANIS)事業開始
- 2010年施設基準としてのICT, 抗菌薬適正使用

## □ 第二段階

→ 中小規模医療機関  
診療所

- 2012年 地域連携加算
- 2016年 薬剤耐性(AMR)対策アクションプラン
- 2017年 抗微生物薬適正使用の手引き
- 2022年 外来感染対策向上加算, 連携強化加算,  
サーベイランス強化加算  
耳鼻咽喉科小児抗菌薬適正使用支援加算

# 薬剤耐性菌対策の現状

---

- 高齢者施設の感染対策が課題
- 水面下で薬剤耐性菌のリザーバーになっている可能性

# 高齢者施設での感染対策の課題

---

- 耐性菌の多発に気づきにくい
- 感染対策の専門家が少ない場合が多く、対策立案が容易でない
- 職員の入れ替わりがあり教育が困難
- 感染対策に割く財源が乏しい
  - 人材, 施設, 医療材料, 環境整備

# 経管栄養関連物品



# 厚労科研のこれまで

---

- 「地域連携に基づいた医療機関における多剤耐性菌の感染制御に関する研究」(2016年～2018年度 八木班)
  
- 「細菌の薬剤耐性機構解析に基づいた多職種連携による効率的・効果的な院内耐性菌制御の確立のための研究」(2019年～2021年度 大毛班)
  - 高齢者施設での耐性菌実態調査と予後との関係
  - 二次医療圏ごとの抗菌薬使用状況解明
  - 微生物検査適正化のためのマニュアル

# 薬剤耐性菌対策の今後

---

- 高齢者施設での薬剤耐性菌の実態把握
- 感染対策ガイドの作成と周知
- 加算算定医療機関が中心となった地域連携

# 広島県内の長期療養施設での 保菌調査

---

## 調査内容

## 広島県内の高齢者施設6か所

介護老人保健施設	3か所	173床
特別養護老人ホーム	3か所	140床



研究協力の同意

## 口腔と直腸より保菌調査 178名

介護老人保健施設	67名
特別養護老人ホーム	111名

1年間



32名 追跡不可

経過観察 146名



# 疫学調査項目

年齢・性別

基礎疾患

日常の活動レベル



薬

半年以内の  
抗生剤使用の有無

栄養状態  
食事レベル  
栄養摂取方法



口の衛生状態

摂食嚥下機能  
構音機能

施設利用日数



# 胃ろうと薬剤耐性菌保菌率との関係を初めて証明

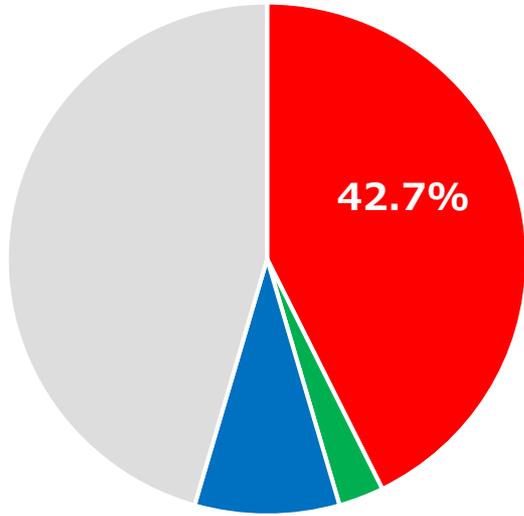
広島県内の長期療養施設での保菌調査

## 結 果

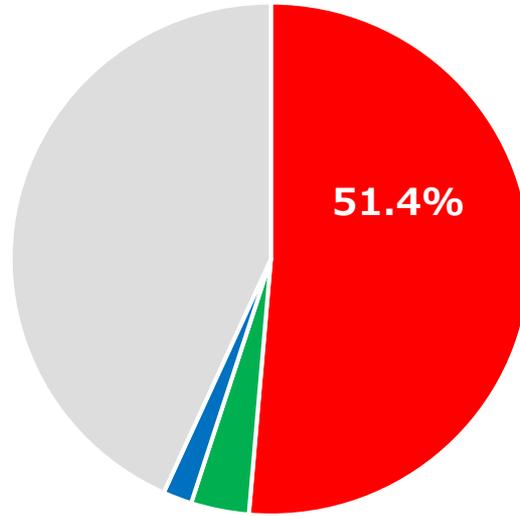
# 薬剤耐性菌の保菌割合

便

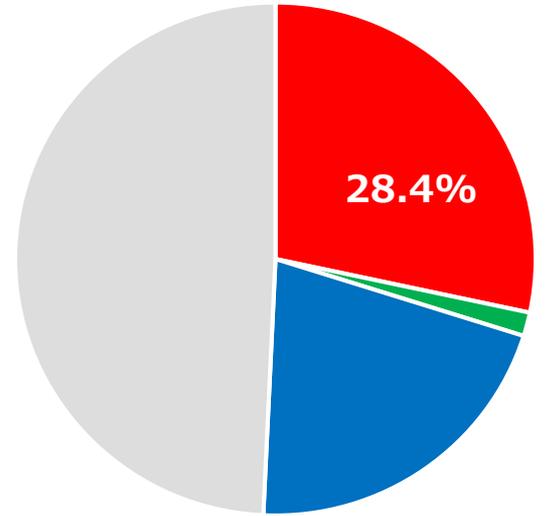
全体



特別養護老人ホーム

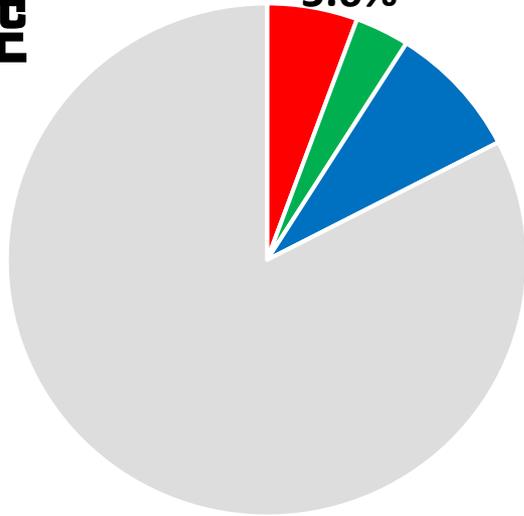


介護老人保健施設

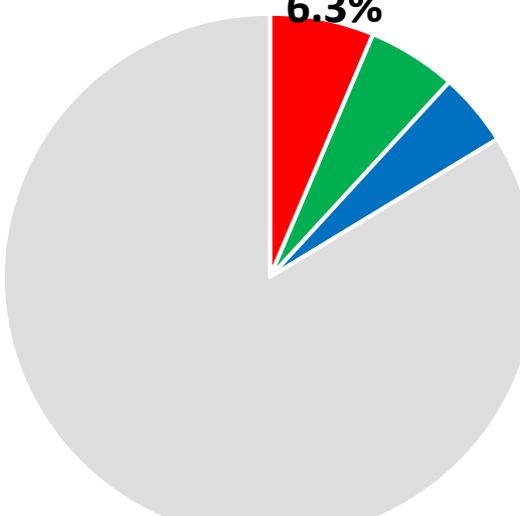


口腔

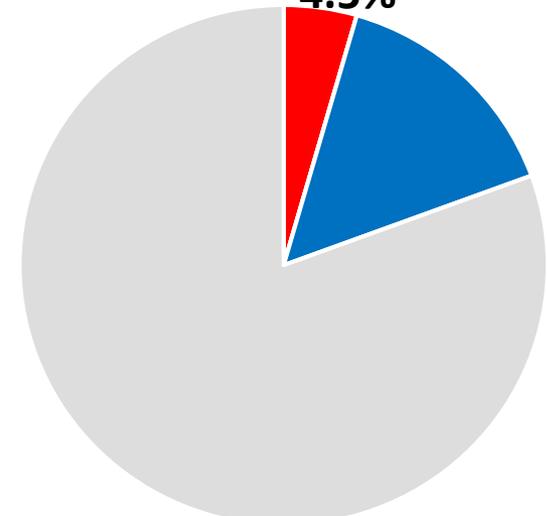
5.6%



6.3%

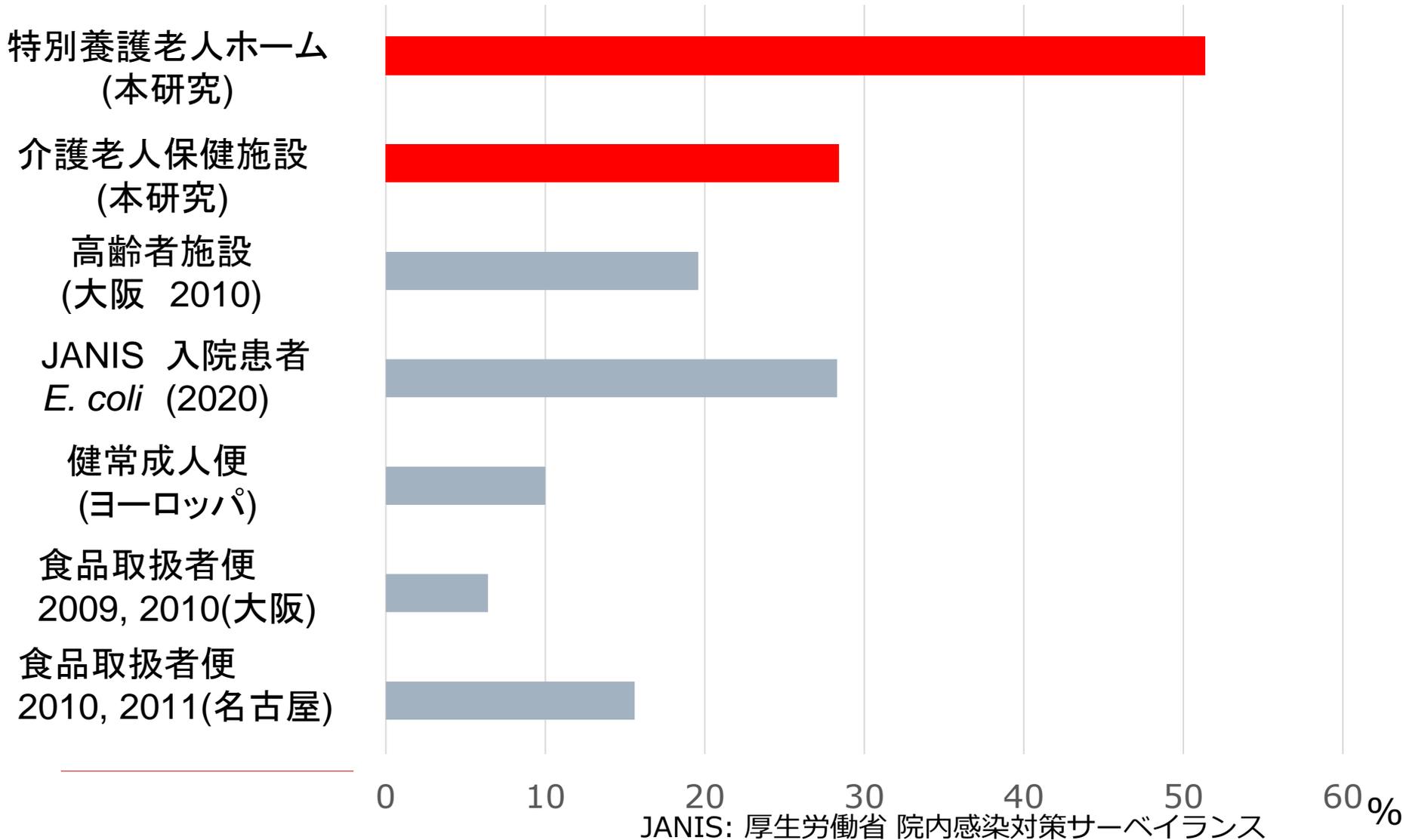


4.5%



■ 薬剤耐性菌 | ■ 緑膿菌 ■ その他 ■ 検出なし

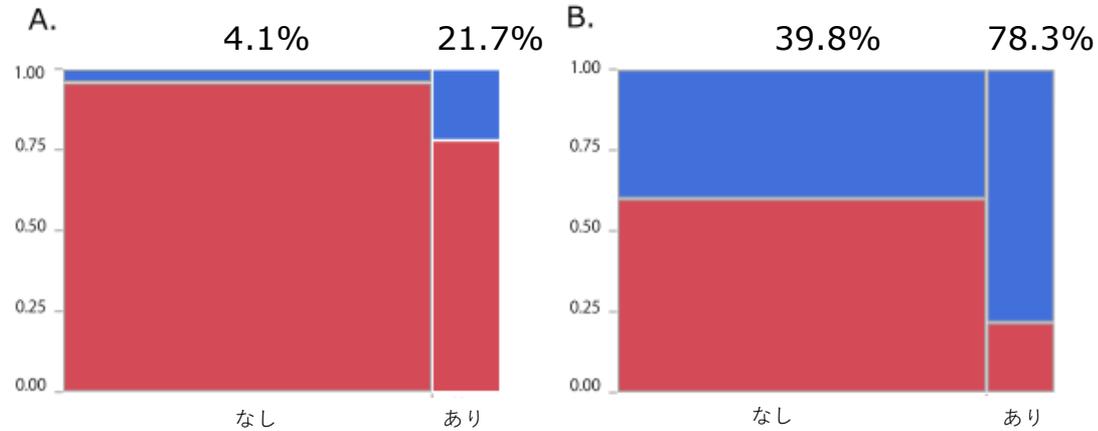
# 便中の 薬剤耐性菌(ESBL産生菌)の割合



# 胃ろうの有無と薬剤耐性菌の関連

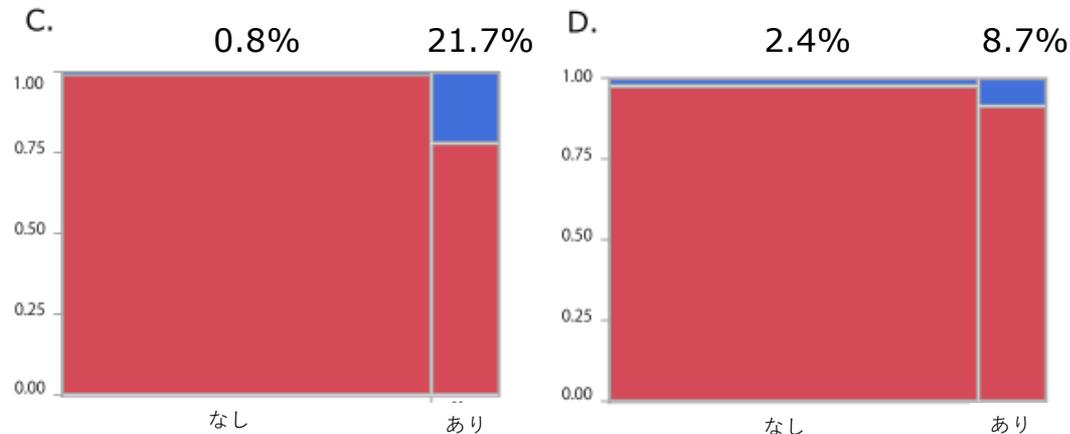
口腔内

直腸（糞便）



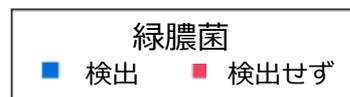
胃ろう

胃ろう

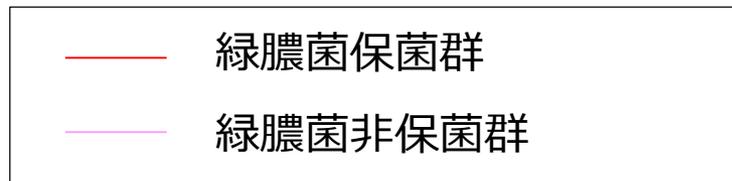
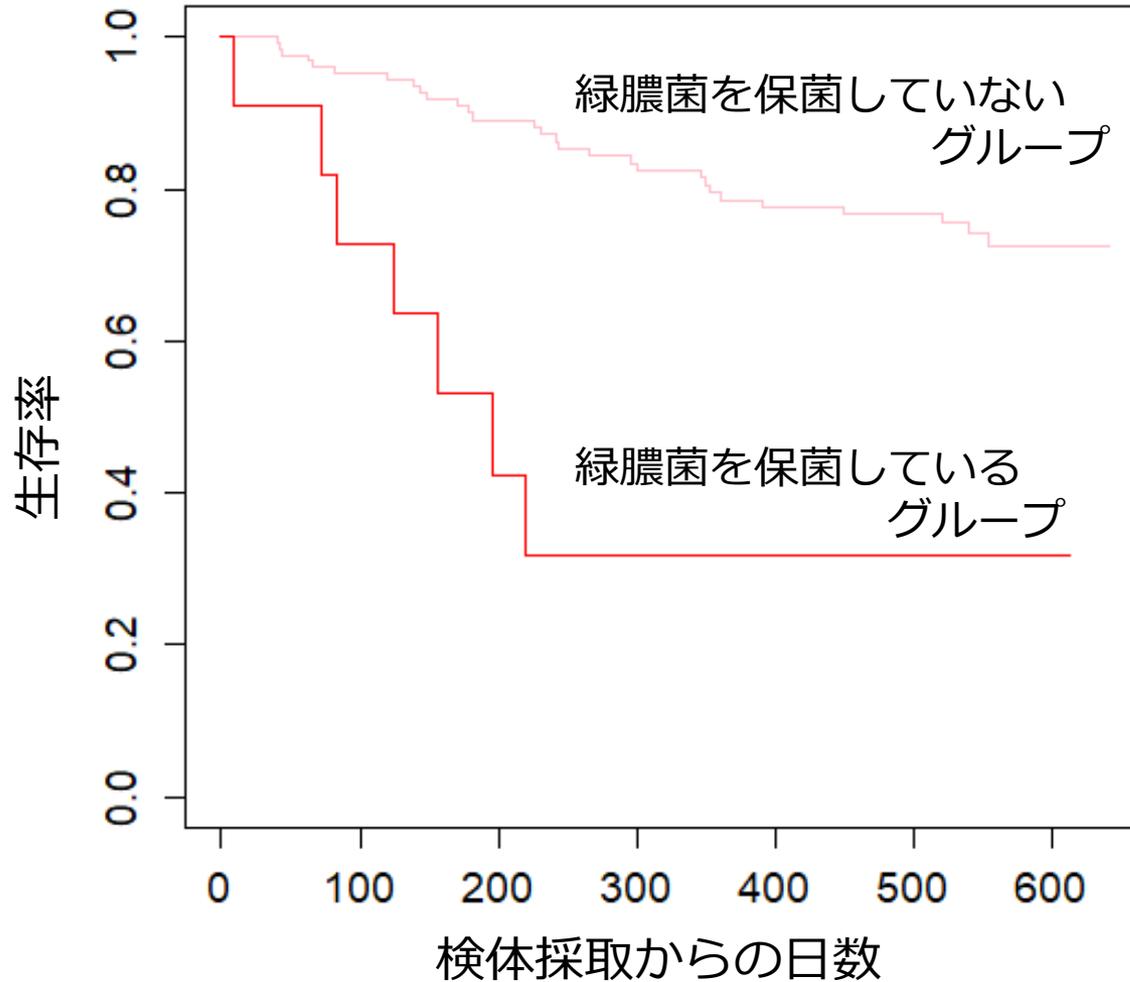


胃ろう

胃ろう



# 緑膿菌と生存との関連



# 本研究のまとめ

- 42.7%の入所者の直腸から薬剤耐性菌が分離された。
- 2010年の大阪の研究から増加している。
- 胃ろうが行われている患者からは耐性菌が検出されやすい。
- 緑膿菌が検出された入所者は生存率が低下する。
- 高齢化が進む中で、高齢者施設における薬剤耐性対策の一助となる研究成果である。